発達理論の学び舎

Back Number: Vol 65

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1281. 思考と感覚を喪失した現代人

1282. 夏期休暇のとある日曜日

1283. 定言命法的歩み

1284. ケン・ウィルバーの最高傑作と新刊書について

1285. 実存性と霊性の充満する書籍を求めて

1286. ケン・ウィルバーの嘆き:フォボスとタナトスの闘争

1287. SESと私の歩み

1288. 内外世界の共創造と共発達

1289. 内外世界の内外観察:日記と霊性

1290. 科学・哲学・霊学と大きな自己との遭遇

1291. 何気ない日の何気ない振り返り

1292. ダイナミックシステムアプローチの再探究に向けて

1293. 気概

1294. この数年間とこの一年

1295. 真に強靭な思考の第一段階:「ヴィジョンロジック段階」の思考特性

1296. 客員研究員としての道

1297. 内なるダイモーンに導かれて:MOOCの多角的な研究

1298. 夢見の意識の中でのダイナミックシステムに関する気づき

1299. その日に向かって

1300. 淡々とした一日

© YOHEI KATO 2018

1281. 思考と感覚を喪失した現代人

窓越しに眼下を眺めると、一階の住人が所有する庭に、鮮やかな赤紫のあじさいのような花が無数に咲いていることに気づいた。これまで私はそれらの花の存在に気づくことがなかった。いや、私の記憶では、それはもう少し小さく、かつ白色をした花ではなかっただろうか。眼下に見えるその花が咲く季節はまさに今であり、秋でも冬でもないことがはっきりとわかった。

その花は、秋や冬には咲きようがなく、この夏という一つの季節の中でしかこの世界に現れないということが明確に理解できた。それは花の外見上の色や形から理解できたと言えるが、それ以上に重要なのは、その花を見たときに私の内側に喚起される感覚がそれを伝えていたことだった。感覚として、その花はこの季節の中で育まれるものであり、この時期に世界に発現する必要があるということが手に取るように理解できたのだ。こうした感覚はもしかすると、人の成長を捉える際にも重要なのではないかと思った。

私たちが固有の花を咲かせる最適な季節や時期というのは必ず存在しており、それを見誤ってはならない。確かに、その最適なタイミングを説明する科学的な理論はいくつも存在するのだが、それは真っ当な感性を持っていれば、最適な時期というのは明確なものとして知覚されるはずだ。おかしいものはおかしく、正しいものは正しいという、絶対的な基準を知覚するような感覚が本来私たちには備わっているはずである。しかし残念ながら、現代を生きる私たちは、この感覚の大部分を喪失してしまったようだ。

一つの花を愛でることのできない人間は、人の成長など一切理解できない。そのようなことをこの赤紫の花は訴えかけているように思えた。この花が今この瞬間にしか咲きえないという歴然とした事実を突きつけられ、現代人が患っている感覚喪失という病について考えを巡らせることになった。自然から学ばされることは非常に多い。

私たちを取り巻く自然を眺めたとき、ある動植物がその時期のこの瞬間に存在しているという「理由の理由」を考えなければならない。考えるというよりもそれは、直視であり直感であり、概念の構築物としての理由が生まれる前の純粋な動因をそのままにして把握しなければならない。思考に頼ろう

とする現代人は感覚を喪失し、感覚を頼ろうとする現代人は思考を喪失している。いや、ほとんどの現代人は思考も感覚も喪失しているような気がしてならない。

いつになったら私たちは、思考や感覚を取り戻そうとするのだろうか。思考や感覚を取り戻し、それを自ら育んでいくことをしない限り、思考と感覚を超えた純粋な現実把握などできはしないだろう。
2017/7/9

1282. 夏期休暇のとある日曜日

今日は空が素晴らしく晴れ渡る一日だった。午前中の仕事を済ませた私は、昼食前に近くのサイクリングロードにランニングに出かけた。今日は日曜日ということもあって、平日よりもランニングをする人の姿を多く見かけた。七月も中旬に差し掛かりつつあるが、気温も涼しく、今日のような天気であれば、多くの人が外に出て体を動かそうとするのも無理はないと思った。

ランニングの最中、広大な青空を優雅に旋回するたくさんのカモメの姿を目撃した。カモメを見ている私はその場からいなくなり、まるで自分がそのカモメになったかのような気持ちになっていた。晴れ渡る大空を優雅に飛び回ることは、これほどまでに心地の良いことなのだということに気づいた。大空を優しく流れる風に乗り、私はいつまでも飛び続けていられるような気持ちに包まれていた。

人間の脳や意識は、このように私たちを人間以外のものに変化させる機能を持っているようだ。サイクリングロードの脇にある運河の表面は、穏やかな太陽を静かに反射していた。自宅を出発してから自宅に戻るまでの全ての時間が、とても清々しく充実したものとして知覚されていた。

昼食を済ませた私は、午前中に取り掛かっていた書籍について少しばかり振り返っていた。フローニンゲン大学で過ごす九月からの二年目の探究生活において、改めてダイナミックシステムアプローチを用いた研究をさらに本格的に進めたいと思った。自分が関心を持ついくつかの学習理論や発達理論を対象に、それらを数式モデルに変換し、コンピューターシミレーションを活用して、これまで得られなかった発見事項を得るような研究をしたい。

時間の変化に応じて、変数間の与える影響が動的に変化するモデルを選び、それらにダイナミックシステムアプローチを活用する研究は、もしかすると今後の自分の博士論文につながるかもしれな

いと思った。それぐらいに、九月から取り掛かろうとしていることは大きなテーマであり、短い期間で成し遂げられるような事柄ではない。ダイナミックシステムアプローチを活用した研究に本格的に着手するまでに、七月の終わりから八月の初旬にかけて、ポール・ヴァン・ギアートの書籍と論文を改めてゆっくりと読み返したいと思う。ヴァン・ギアートが発達科学の世界に残した仕事は、カート・フィッシャーのそれに匹敵するぐらいに重要であり、彼の仕事をさらに前に進めるような取り組みに着手したい。

午後からは、ヴァン・ギアートの論文が掲載されている“Cognitive Developmental Change (2004)”の続きを読む。夏期休暇に入り、毎日少なくとも一冊の専門書を読み進めることができているため、探究の進捗度合いは順調といえば順調だ。自らの仕事をなすための土台をとにかく構築するために、この夏の時間が存在し、これからの数年間が存在するのだと思う。2017/7/9

1283. 定言命法的歩み

魂に刻印する形で進むこと。魂から刻成される形で進むこと。この二つを通じて日々の一歩一歩を形作っていくことをしていかなければならない。魂に刻まれないものや魂から生まれ出て来ないものは断固として排斥しなければならない。

私にとって、カントの定言命法で表されるような「ねばならない」という言葉は非常に大きな意味を持つ。実はこのテーマは、今から四ヶ月前のウィーン訪問時に浮かんでいたものであり、今日これについて改めて言及することになるとは思ってもいなかった。

慣習的な意味での定言命法ではなく、透徹した意志の作用から生み出される定言命法を何よりも大切にしたい。これは私にとって、自己の行為に対する絶対的な倫理観から発せられる言葉だ。その言葉の前置きには、何らの前提条件はないのだ。言ってみれば、それは「無条件の行為」を促す言葉である。

先ほど夕食前の最後の仕事に取り組む前に、ソファに腰掛けて少しばかり休憩を取っていたが、その時に生まれた冒頭の考え方は、まさに何の前提条件も必要ない。自らの仕事に前提条件など付けようがないし、そんなものを付けてはならないのだ。それを成すのが必然であるかのように、絶対的にそれを成すという志で日々の行為を積み重ねていきたい。そのようなことを静かに思っていた。

第二弾の書籍から緩やかに手を離すことによって、以前と変わらない、いや以前以上に自分がなすべきことに打ち込めているような気がする。書籍というのは、徹底的に他者のために執筆しながらも、決して他者を見てはならないということを今回痛感させられた。徹頭徹尾、他者のために文章を執筆しながらも、透徹した眼差しで自己だけを見なければならないということに遅まきながら気づかされた。この気づきは最初の作品の時には得られなかったものである。

もう少し説明を加えるならば、徹底的に自己を見つめる過程の中で文章を紡ぎ出し、それが結果として他者に資するようにしなければならないのだと思う。今回の作品を通じて、他者を見ていては自分の仕事など継続しようがないという絶望的な希望が得られた。自分の仕事が他者の基底につながるところまで、私は自己だけを見つめなければならない。それが、魂に刻印する形で進むことの一面であり、魂から刻成される形で進むことの一面である。2017/7/9

1284. ケン・ウィルバーの最高傑作と新刊書について

昨夜はまたしても印象的な夢を見た。夢の持続時間は長くはないのだが、その中身についてはっきりと覚えている。夢の中で私は、米国の思想家ケン・ウィルバーが残した傑作“Sex, Ecology, Spirituality: The Spirit of Evolution (1995)──邦訳『進化の構造』”が持つ二つの重要な点について独り言をつぶやいていた。おそらくこの夢は、昨日の顕在意識下での活動に大きな影響を受けているだろう。

というのも、今日はゆったりとした時間が取れるため、昨夜の就寝前に本書の第二部を再読しようと思い立ち、本書を書見台に立てかけておいていたのである。確かに、SESは800ページを超す大著だが、本書の言語表現はさほど難解ではなく、むしろウィルバー自身が指摘するように、一つの大きな小説作品を読むかのごとく本書を読み進めることができる。今日は一日をかけて、第二部から始まり、再び第一部に戻り、最後に注記をできるだけ丁寧に読みたいと思う。

ウィルバーは2006年を境に執筆量が極端に低下したが、一昨年あたりから再び執筆を開始したようである。昨夜は偶然ながら、ウィルバーの最新書“The Religion of Tomorrow: A Vision for the Future of the Great Traditions──More Inclusive, More Comprehensive, More Complete (2017)”が五月に世に送り出されていることを知った。RTと略字で呼ばれる本書もSESと並び、800ページを

超す大著である。本書の目次を確認したところ、目新しい点といえば、意識の発達に関して、これまでウィルバーは第二層の意識構造──キーガンの発達モデルで言えば発達段階5から6──の説明までにとどめていたが、本作では第三層の意識構造──発達段階7から9──をかなり詳しく説明していることがわかった。

第三層の意識構造というのは、正直なところ、現代人が常識的な日常生活を送っていては到底到達できないものであるため、この段階の特性について余程の学術的関心がない限り、この部分の記述は多くの人とにとってはあまり有益ではないかもしれない。また、第三層の意識構造に関する理論モデルの大部分は、インテグラル・ヨーガを創設したシュリ・オーロビンドの理論体系が元になっており、これは実証的なデータに基づいて構築されたものではなく、オーロビンド自身の経験と『バガヴァッド・ギーター』に着想を得て構築されたものであることには注意が必要である。

これはもちろん、実証的なデータに基づいて構築された理論が信頼に足り、一人の人間の経験から生み出された理論は信頼に足るものではない、ということを述べているわけではない。オーロビンドの理論やバガヴァッド・ギーターの記述は、多くの関係当事者の合意によって生み出され、そうした高度な段階に至る方法に関しては再現性が確保されたものであるがゆえに、実証的なデータを積み重ねた末に生まれた理論と何ら変わりのない信頼性を持っていると見ることもできる。

重要なことはむしろ、ウィルバーの意識の発達理論において、第三層の意識構造と呼ばれるものは、とりわけ霊性を司るものであることを知っておかなければならない点にあるだろう。言い換えると、第三層の意識構造を他の発達領域と混同してはならず、また、他の領域に還元してはならないのだ。

もう一つ本書で目新しい箇所といえば、本書を締めくくる最終章で取り上げられている“integral semiotics（統合的記号論）”と呼ばれるものだ。これは、これまでの作品にはない、全く新しい概念なのかもしれないし、これまでの作品の中に登場した考え方を一段高次元にまとめ上げた末に生み出された概念なのかもしれない。いずれにせよ、一昨年から記号論に多大な貢献を果たしたチャールズ・パースの仕事や「教育記号論（edusemiotics）」を創始したインナ・セメツキーの仕事に関心を持っていたため、「統合的記号論」という言葉は非常に興味深い。

ウィルバーは70歳に近づいてきているが、この時期に彼が到達した記号論というものがどういったものなのかを知るために、この箇所は重要な役割を果たすであろう。私は、ウィルバーの仕事から多大な影響を受けてきたことは間違いなく、今回の書籍はいくつか自分にとって重要であろう箇所があるために、ぜひとも本書を読み進めたいと思う。2017/7/10

1285. 実存性と霊性の充満する書籍を求めて

昨日の天気とは打って変わり、今日は曇り空が広がっている。今日は月曜日であるというのに、通りを行き交う人が少ない。もしかすると、この街に住む人たちの多くも夏期休暇に入り、どこか別の国に旅行しているのかもしれない、という大雑把な仮説を持った。だが、それぐらいに辺りは静かであり、人が少ない。

今日は早朝から、ウィルバーの労作SESの第二部を読み進めていた。本書は、ウィルバーが自らの実存的な問題意識を強く投げかけた作品であることに改めて感銘を受けた。まさに、本書にはウィルバーの霊性が結晶化されており、人は自らの霊性を投影させる形で文章を執筆するとき、そこには途轍もない密度の思想体系が表出するのだと思った。同時に、ウィルバーはそれ以降、SES以上の作品を残せていないことにも考えを巡らせていた。

自らの霊性が一つの固有なものであるがゆえに、その人の霊性をひとたび完全に具現化させるような書物を書き残してしまうと、もはや二度とそのようなものが書けなくなるのかもしれない。ここでは、霊性というものを一つの存在と位置づけ、一人の人間には一つの固有の霊性しか備わっていないという前提を置いている。また、ひとたび固有の霊性を具現化させることを果たしたら、二度と同様のことが行えないという前提も置いている。そうした前提を置かざるをえないほどに、自らの霊性をかけて多数の書籍を執筆するというのは難しいことなのだ。

実際に、自らの霊性が真に具現化された書籍を複数執筆すことのできた人物はほとんどいないだろう。そのように考えると、一人の人間には一つの霊性があり、一つの霊性には一つの役割があり、書籍の執筆を通じてその役割を果たすと、その霊性はこの世界に新たな問題意識を書物を通じて投げかけることをやめてしまうのかもしれないと思った。

霊性の役割を果たす手段は複数あったとしても、一つの表現手段でその霊性が持っている全てを具現化させると、その手段を通じては二度と同じようなことができないのではないかと思った。そのような思いでSESを読んでいると、やはり私はこうした書物こそを読み進めていかなければならない、と気持ちを新たにした。一人の人間の霊性が充満する書籍というのは、この世の中に数多く存在する。

しかし、世の中に出回っている書物の数からして見れば、それは圧倒的に少数である。著者の実存性が滲み出てくることもなく、霊性に根ざした問題意識をこの世界に投げかけることをしない書物を読む暇はない。著者の実存性と霊性が充満する書物を選りすぐり、そうした書物に日々触れていくことを心がけなければならない。実存性や霊性が死にかけている現代社会においては、なお一層このような態度を持って書物と向き合わなければならないと思う。2017/7/10

1286. ケン・ウィルバーの嘆き:フォボスとタナトスの闘争

昼食後、夏季休暇の後半に読む予定の文献リストをもう一度確認した。200冊ほどの購入リストの中で、特に最近加えた70冊のタイトルを再度眺め、そこから15冊に絞って先ほど購入した。そのうちの12冊は英国のアマゾンに注文をし、残りの3冊は米国のアマゾンに注文をした。価格の観点と書籍の量の観点からすると、ドイツのアマゾンよりも英米のアマゾンの方がすぐれているように思える。

より細かく見ると、英国のアマゾンよりも米国のアマゾンの方が価格的に良心的だ。英国のアマゾンと比較すると、米国のアマゾンで古書として売り出されている数は桁違いに多く、必然的に価格も安い。ここ最近の日記でも触れているが、来年か二年後には再び米国に戻ろうと思っているため、すでにその時に購入する予定の書籍リストにはその旨の印が付けられている。これは最大の理由ではないが、専門書の入手しやすさという点は、私が米国に再び戻ろうとする理由の一つであることは確かだ。

午前と午後の大部分の時間を使って、ケン・ウィルバーのSESの第二部を読み進めていた。発達研究に携わる者として、第一部に記述のある段階モデルの話が面白いのは間違いないが、第二部はウィルバーが現代に投げかける強い問題意識が色濃く現れていて、非常に読みがいがある。本書を執筆している時のウィルバーは、間違いなく自己と真摯に対峙し、現代社会と深く対峙していた

のだと痛感させられる。第二部を読みながら、現代人はフォボスかタナトスのどちらかに囚われ、現代社会は両者の闘争状態にあることを実感させられる。

フォボスとは、自らが過去に通ってきた、あるいは自らを支える低次の発達段階を破壊しようとする衝動であり、同時に未成熟な上昇思考を伴うものである。上へ上へと成長を希求し、含んで超えていくはずの低次の段階を抑圧するような衝動を持つのがフォボスに囚われた人間の特徴である。成長至上主義が根強い現代社会において、フォボスに囚われた人間はとても多いように思える。その末路は、望むような段階に到達することからはほど遠く、低次の段階を破壊することに伴う自己崩壊が待っているだろう。

一方タナトスは、高次元のものを排斥しようとする衝動を持ち、低次の段階に停滞してしまうか退行してしまう特徴を持つ。ここでは、高次元のものを避け、それを殺す形で低次元のものを救おうとするような衝動を持つ。

現代人の多くが既存の発達段階に留まり続けるというのは、フォボスかタナトスのどちらかの作用が強く働いていることに起因しているかもしれない。そして、広く現代社会を見渡してみると、低次の段階を認めないフォボスに囚われた思想と、高次の段階を認めないタナトスに囚われた思想が、お互いの陣営を譲らず、闘争状態にあるように思えてしかない。こうした状況では、個人も社会も発達の歩みを止めてしまうのは無理もない。ウィルバーがSESを通じて投げかけた重要な問題意識のうちの一つは、まさにこの点にあるだろう。

第二部を読んでいると、ウィルバーの嘆きの声が自分の内側に重厚に響いてくるかのようだ・・・。
2017/7/10

1287. SESと私の歩み

今日は一日中、ケン・ウィルバーのSESを読んでいた。本書を読み進める途中で、森有正先生の『デカルトとパスカル』と清水博先生の『「いのち」の自己組織』という二冊の和書を少し読み進めていたが、本日はウィルバーで始まり、ウィルバーで終わる一日だったと言える。なぜ私がこの時期にウィルバーの書籍に手を伸ばしたのかを少しばかり考えていた。

私がウィルバーの仕事に出会ったのは、今からかれこれ八年近く前であり、特に米国のジョン・エフ・ケネディ大学（JFK）に留学している時にウィルバーの思想体系を熱心に追いかけていた。JFKを卒業した後は、しばらくウィルバーの思想体系に触れることから遠ざかっていたように思う。もちろん、折を見て彼の書籍を読み返すことは度々あったが、大学院に在籍中のように真剣にウィルバーの書籍と向き合うことは無くなっていった。

それから四年ほどの時間が経ち、私は再びウィルバーの残した傑作であるSESに帰ってきた。それは、これまでの自分の歩みを確認するためでもあり、これからの歩みを見出していくためでもあったのかもしれない。SESを執筆するに際して、ウィルバーは古今東西の過去現在の偉大な思想家や学者の理論・研究を素材とし、それらに内包されている価値を正確に見極めた上で一つの数珠を作るかのように、無数の思想体系と理論体系を一つの大きな物語として編纂している。

かつてウィルバー自身が自らを称して「地図の製作者（map-maker）」と述べていたように、本書はリアリティを眺めるための巨大な地図である。ウィルバーがさらに指摘するように、読者にとってはこの巨大な地図を携えて、いかにこのリアリティを生きていくかが問われることになるだろう。

ウィルバー本人の肉声を知っているだけに、850ページほどの本書を読んでいる最中は、絶えず彼の肉声が聞こえてくるかのようであった。複雑性科学と発達科学を架橋する試みに従事していると、私がこれまで従事していた意識の形而上学の存在を時に忘れてしまうことがある。

ウィルバーの書籍は、そうした私の襟を正すかのように、客観的な探究領域だけではなく、主観的な探究領域が等しく重要であるかを教えてくれる。四年前から現在にかけて、人間の発達現象をとりわけ科学的な認識の枠組みと方法をもってして探究を進めていたため、発達現象に関してSESの中で記述されている事柄よりも多くのことが、現在の発達研究の世界の中で発見されていることに気づく。

私たちがSESを読むときに注意をしなければならないのは、ウィルバーが本書を執筆する際に採用した「志向的一般化」によって漏れてしまった知の存在を正しく認識し、それをウィルバーの大きな物語の中で自ら捉え直していくことだろう。SESの中で記述されている発達段階モデルを見ると、志向的一般化という方法を採用することによって、確かに発達プロセスの骨子は捉えられているが、

本来そこに存在する豊かな肉が削ぎ落とされてしまっている印象を拭うことはできない。そうした点において、SESを通じて発達のプロセスやメカニズムに関する理解を深めるような段階はすでに過ぎ去ってしまったことを知る。

ただし、ウィルバーがこの現代社会に対して抱いていた強い問題意識には、依然として強い共感を私は覚える。自分の内面の成熟に合わせて、SESとの向き合い方が変化していることは確かであり、これからも折を見て本書を紐解くことになるだろう。いつか、松永太郎氏が翻訳した日本語で是非とも本書を読んでみたいと思う。日本において、このように本当に優れた書籍が絶版になってしまうのは残念で仕方ない。2017/7/10

1288. 内外世界の共創造と共発達

連続的な波の流れが途切れ、非連続的な波の隙間に入り、再び連続的な波の中に組み込まれたような感覚があった。今朝の起床直後の気づきを一言で表現するとそのようになる。これまで自分の内側で連続していたものが途絶え、新たな連続性を持つものに自分が組み込まれたことを知る。発達とは連続的であり、なおかつ非連続的なものだということを、自ら自身で直接体験するような出来事だった。

それは小さな断絶と新たな継続を体験するようなものだった。一つの発達の波から新たな発達の波に移行する瞬間には非連続的な飛躍が伴う。まさに今朝の私は、非連続的な飛躍の最中における一瞬の溝を知覚し、そこから新たな波の中に組み込まれた自分の存在を知覚することができた。幾分不可思議な現象であり、それをうまく説明できたか自信がないが、自らの直接経験を純粋に表現すると概ねそのようになるだろう。

ある夏の火曜日の早朝。何が変わったのかわからないが、昨日とは全く異なるような世界が今この瞬間に広がっているという認識を持った。本当に何が変わったのかわからない。寝室も書斎も昨日と全く同じであるし、それらの部屋から見える外の景色もこれまでと同じであるように見える。だが、それらの全てが明らかに昨日と全く違う感覚で捉えられているのだ。

目に見える景色は全く同じでも、それを知覚し、一つの感覚として捉える自分の内側が一変してしまったかのようなのだ。「あぁ、自分は次に進む時が来たのだな」という言葉が自然と漏れた。昨日ま

での自分にはもはや戻ることはできないという事実を突きつけられながら、同時に、私は次に進む時がこの瞬間にやってきたのだという事実も突きつけられていた。それは望むと望まぬとにかかわらずやってきた。

突然事故に遭うかのように、突然死に直面するかのように、それはこちらの意思とは全く関係のないところからやってきた。昨日の自分と今日の自分を比較した際に、結局何が変化したのかというと、それは内側の感覚だと言えるだろうし、世界を認識する枠組みだと言えるだろう。両者をさらに別の表現で言い換えれば、昨日の自分を取り巻く薄い層の上に、また別の自分が薄い層として立ち現れている感じだと述べると分かりやすい。この自分から今この瞬間の世界を見渡してみると、やはり全てが新しいものとして知覚される。

昨日までには見落としていた無数の差異が、今この瞬間の世界の至るところに充満していることがわかるのだ。それは内側の世界が一変すると同時に、外側の世界すらも一変してしまったかのようである。そのようなことを考えると、内外のリアリティというのは相互連結し、両者は共創造し、共発達することが手に取るようにわかる。そのような気づきがもたらされたのが、今朝の起床直後の出来事だった。2017/7/11

1289. 内外世界の内外観察：日記と霊性

早朝の空の遥か彼方に、数羽の鳥が舞っているのが見える。一見すると、それらの鳥の動きは不規則であるように思えるが、間違いなく、それはある規則に貫かれたものであることがわかる。私はもはや外側から観察する者としてその規則を把握するのではなく、対象そのものの内側からその規則を把握したいと強く思った。大空を舞う鳥の一羽一羽と同一化し、彼らの視点を通して大空を舞う時、世界はどのような形で認識され、その認識と動作を貫く法則が何であるのかを知りたい。

外側からの観察と内側からの観察はまるっきり異なるものである。私は一人の探究者として、その片方ではなく、それらの両方を絶えず行い続けたいと思う。内側と外側からの観察を、自己を取り巻く内側の世界と外側の世界の双方に対して行うのだ、という強い気持ち。内外世界の内外観察をこれほどまでに希求したことはかつてなかったかもしれない。

もはや片方の世界を片方の観察方法で捉えるようには生きられないのだ。それは呼吸をせざるをえないのと同じほどにそうせざるをえないのである。内外世界の内外観察。それを今日から新たな覚悟で推し進めていこうと思う。

昨夜の就寝前に、一つ重要な気づきがもたらされた。それは就寝に向けて歯を磨いている時に降ってきたものであり、すぐさま書斎に戻り、その気づきをノートに書き留めておいた。それは極めてシンプルなことなのだが、これまで意識されていなかったこととして、非常に重要な意味を持つ。私はこれまで、自分が日記を書くことの意味を様々な側面から書き留めておいたように思う。

昨夜の気づきは、日記を書く新たな意味を私にもたらした。端的には、日記は自らの霊性の涵養と発達のためにあるのだ、ということに気づいたのだ。これは私にとっては全く新しい気づきであった。もしかすると、すでに私はそれに暗示的に気づいていたのかもしれないが、それが明示的な言葉の形になったのは昨夜が初めてであった。

日記というのは、単に日々の出来事の記録ではなく、それに対する単なる感想を書き留めることでもない。また、日記というのは、出来事を何らかの枠組みを通じて解釈し、そこから新たな気づきを得ることによって解釈の枠組みそのものを小さく変容させていくということも超えた意味を持っている。結局私が気づいたのは、日記は自らの霊性を養い、それを育むものだということだった。

日記というのは、自らの霊性を媒介するものであり、そうなると自らの言葉というのは霊性そのものに変わりないのではないか、という思いがやってくる。自らの言葉を紡ぎ出しながら、私は自らに与えられた固有の霊性を養い、それを育んでいきたいと思う。日記と霊性は表裏一体の関係にあり、日記は霊性に涵養と発達をもたらし、霊性は日記という自己に涵養と発達をもたらす。この関係性にこれまでどうして気づけなかったのだろうか。

今日記と霊性の関係について考えを巡らせていた時に思いついた重要な語彙とセンテンスがあったのだが、それらはどこかに消えてしまった。そのように考えると、日記と霊性の間には、今の私には気づけない深遠なものが横たわっているような気がしてならない。2017/7/11

【追記】

日記、すなわち自らの言葉が自身の霊性の現われに他ならないのであれば、日記を書き留めることは霊性を涵養・発達させるのみならず、それは霊性の発揮に他ならないのだと思う。結局のところ、自らの霊性を涵養・発達させていくためには、この世界の中で自らの霊性を発揮する営みに従事しなければならないだろう。私たちを取り巻く世界に関与する形で発揮されない霊性は、涵養も発達もありえない。そのようなことを思う。2017/7/18

1290. 科学・哲学・霊学と大きな自己との遭遇

昨日は、終日ウィルバーのSESを読み進めていた。私は改めて、自分を取り巻く内側の世界と外側の世界を、内側と外側の両側面から探究したいと強く思った。それは現在の私が、どちらかの世界の中を彷徨い、内外のどちらかの観点を持って捉えるような傾向にあることと関係しているだろう。今私が所属しているフローニンゲン大学では、人間の発達を外側の観点を用いて探究することを行っている。

人間の発達は内側の現象だが、それを外側の科学的な方法を用いて探究しているのだ。こうした探究方法でしか得られない発見事項があるのは確かであるし、こうした探究に従事しなければ獲得され得ない自らの認識能力というものがある。だが、言うまでもなく、そうした探究方法では捉えることのできない発達現象があることは確かであるし、こうした探究に従事していては涵養され得ない認識能力があるのも確かなのだ。

日々、科学的な探究に従事すればするほどに、哲学的な探究に従事したいという思いが湧き上がり、哲学的な探究に従事すればするほどに、科学的な探究に従事したいという思いが湧き上がる。そして、科学的な探究と哲学的な探究に従事すればするほどに、霊学的な探究に従事したいという渇望が生まれる。これらの三位一体の探究を自らに課したい。それらの一つだけを通じて世界を眺めることは、単色の世界を眺めていることに等しく、大きな空虚感を私にもたらす。

科学も哲学も霊学も、そのどれか一つを探究していくことがどれほど無味乾燥としたものであり、絶望的な虚無感を自分にもたらすことかは計り知れない。それら三つの領域を一つの統一体として同

時に探究していくこと。これが自分の取るべき態度であり、進むべき道なのだと思う。そのようなことを考えながら、昨夜の夢について思い返していた。昨夜もまた印象的な夢を見た。

外壁のない数階建ての建物の中に螺旋階段があり、私はその階段を上っていた。その建物の最上階に到着すると、どこかで会ったことのあるような雰囲気を醸し出す、見知らぬ男性が私を待っていた。その男性は、真剣な表情と笑顔が混じったような表情で、銃口を私に突きつけた。すかさず私もその人物に銃口を突きつけた。

二人の間には静かな緊張があり、私たちはしばらく銃口を向け合っていた。最上階にも外壁はなく、外の世界の様子がよく見えた。すると、一階からその男性の仲間と思われる人物が螺旋階段を上ってこようとしていることがわかった。銃口を突きつける男性の気が一瞬緩んだのを見て取った私は、その建物から別の建物の最上階に飛び移った。

その男性は私に発砲することもなく、私が逃走する様子を静かに眺めているようだった。私は別の建物に飛び移り、その建物から外に出て、森の方に逃げ込んだ。その森には、綺麗な竹やぶがあり、奥の方に温泉らしきものが湧いていることに気づいた。私は、その温泉で休憩をすることにし、湯船に浸かった。

すると人間の言葉を理解するイノシシの親子が現れ、彼らも浴槽に浸かり始めた。とても小さなイノシシの子供が私の方に近寄ってきて、「お風呂にゆずを浮かべるのは人間もイノシシも同じだね」と述べた。その言葉を聞いた時、イノシシの風習と人間の風習に重なることがあるのだと純粋な驚きを持ったが、それ以上に何か重要なことを私は気付かされているようだった。その後、夢の場面が突如として変わった。

何やら私は、自分のノートに探究的な問いを書き連ね、その問い一つ一つに自分なりの回答を与えているようだった。そのノートは、異常なほどに緻密に書き留められており、自分でも驚くほどであった。ノートを書き留めた後に横を見ると、そこに母がいた。私は母に話しかけ、実は父が理髪師であり、哲学者でもあることを伝えた。

それを述べた私自身も思考が錯綜しているようであり、父の職業がそのようなものであるはずはないのだが、なぜかそれが事実であると思い込むような形で母に話しかけていた。そして、先ほどまで書

き留めていたノートを母に見せながら、これは父とのやり取りによって生まれたものだということを述べた。特に、ノートに書き綴られた一つ一つの問いが、理髪師であり哲学者でもある父から生まれたものであると主張している自分がそこにいた。

そこで私は夢から覚めた。夢から覚め、ベッドから身体をすぐさま起こそうとすると、一瞬足がぐらついた。そのぐらつきは、私の内側の何かも同時にぐらつかせたようだった。

夢から覚めた後、私は夢を見ているその自分の存在に気づいた。これまでその存在は意識されることがなく、絶えずそこにいたのだが、それがあまりにも当たり前な存在としてみなされていたがゆえに、存在していないも同然の存在になっていた。この気づきを得たとき、夢を見ていた私とその存在に気づいた私が鉢合わせとなり、どちらが自己なのかと一瞬席を譲りあった。不思議なことに、お互いに反目し合うことなく、どちらも自己であることに私は気づいた。

そして、夢を見ていた私とその存在に気づいた私がどちらも自己であることに気づいた私は、これまでの自分にはない大きな自己であることに気づかされた。早朝、私はより大きな自己が出現する瞬間を目撃した。2017/7/11

1291. 何気ない日の何気ない振り返り

今日は起床直後に突発的な雨が降ったが、午前中の早い段階で天候が回復に向かった。そのおかげもあり、昼食前にノーダープラントソン公園にランニングに出かけた。雨が止んだ後の晴れ独特の空気と香りが漂う中、私は颯爽と公園を走っていた。現在の仕事が思考を司るものであればあるほどに、自らの身体を調整しなければならないことを強く実感する。

自分の身体は紛れもなく思考運動の土台となっており、身体の基礎が確立されていないと、思考運動を日々継続させていくことはできない。ノーダープラントソン公園を抜けると、私は行きつけのインドネシアンレストランに立ち寄り、いつもトレーニング後に食べることにしているお決まりのメニューを注文し、その足で行きつけのチーズ屋に行き、そこでも毎日摂取しているナッツ類とチーズを購入した。

身体を動かすことのみならず、身体を動かすために必要な食事についても色々と心掛ける必要がある。良質な食事を必要な分だけ摂ることが何より重要である。身体を動かすことと食事は、特に日頃から気をつけていることだ。昼食後、メールを確認すると、この秋から始まる「実証的教育学」のプログラムのコーディネーターであるマイラ・マスカレノ教授から連絡があった。

有り難いことに、私の近況を気にかけてくれているようであり、一年目のプログラムが無事に終わったかどうかの確認と、この夏の計画についての質問であった。マスカレノ教授からのメールは大きな偶然であり、ちょうど二年目のプログラムで必読となっている専門書を購入したところだった。教授へのメールに対し、一年目のプログラムが無事に終了したことと、この夏はデンマークとノルウェーに行く旨を伝え、マスカレノ教授が母国のチリに戻るのかどうかを尋ねた。メールのやり取りの後、出版記念ゼミナールに向けた資料作りに着手した。

今日はちょうど第二回目のクラスの講義資料の作成に取り掛かり、ミクロ・メソ・マクロな成長に関して、これまでの自分の研究データから具体例を引用したり、フラクタル次元に関する説明とそれを分析する手法についてなど、書籍に書くことのできなかった点を盛り込んだ。

また、書籍の中でコラムとして簡単に触れた、私の論文アドバイザーを務めてくださっているサスキア・クネン教授の実証研究についてより詳しく取り上げることにした。具体的には、ロバート・キーガンが提唱した仮説モデルである「意味構築能力と葛藤量の関係」について、それをどのように数式モデルとして表現し、どのようにコンピューター・シミレーションをするのかを紹介し、いくつかのシミレーション結果を紹介したいと思う。

それに加えて、本書の本文の中で簡単に触れたダイナミックネットワーク理論についても、より説明を加えたいと思う。発達研究を進めていくにあたって、私が最も着目しているのはシステム科学とネットワーク科学であり、ダイナミックネットワーク理論には両方の科学分野の考え方が盛り込まれている。最先端の発達研究では、発達現象をシステムかつネットワークと捉えることが徐々に浸透し始めており、ダイナミックネットワーク理論には個人的に熱い視線を注いでいる。また、私のメンターであるルート・ハータイ教授がこの理論に精通し、彼の仕事が身近なところにあるということもあって、第二回のクラスで改めて取り上げたいと思った。

資料作りに没頭していると、いつの間にやら一日が終わりに差し掛かっていた。就寝前に、少しばかり作曲の学習と実践を行い、明日という新たな一日を迎えたい。2017/7/11

1292. ダイナミックシステムアプローチの再探究に向けて

雨雲が視界一面に広がる早朝。起床してみると、寝室の窓から薄い雨雲が広がっているのが見えた。辺りはとても静かであり、今は激しい雨が降っているわけではない。ただし、昨夜のどこかの時間帯で、強い雨が降っていたことを示す痕跡が辺りに残っていた。

今日は午前中から昼過ぎまで雨のようだ。幸いに、今日の分の食料はすでに確保しているため、買い物に出かける必要もない。このような日は、終日書斎の中で仕事をするに限る。昨日、自分の内面世界が一変するような感覚を得たが、今日はいたって普段通りの感覚に包まれている。だが、その「普段通りの感覚」というものが、やはり以前のものとは異なっており、昨日を引き継いでのものとなっている。

夏季休暇は、残り二ヶ月弱あるため、私はもう一度メソな発達を経験するかもしれない。いや、それが起こるような生活態度でこれからの日々を過ごそうと思う。一切の仕事はまだ始まっておらず、今は単なる準備期間でしかないのだから。

昨日は、私の論文アドバイザーを務めてくださっているサスキア・クネン教授の最新の論文を読んだ。その論文は、発達研究にコンピューター・シミレーションを活用する意義について書いたものであり、特に青年期の発達研究にダイナミックシステムアプローチを活用する意義について紹介している。分量はそれほど多くなく、比較的短い時間で読み通せるのだが、改めて得ることの多い論文であった。知識的に何か新しいことを得たというよりも、再度ダイナミックシステムアプローチを深く学び、それを活用した研究に従事していこうという意欲を掻き立てられるような論文であった。

概念モデルや理論モデルの構築に始まり、数式モデルの構築、そしてシミレーションの実行に至るまでの一連のプロセスを改めてここで学び直す必要があるように思えた。というのも、九月から始まる二年目のプログラムにおいて、ダイナミックシステムアプローチを本格的に活用した研究に従事したいと考えており、それに向けた準備をじっくりとするのはこの時期が最適だからである。

この論文を読んだ後、クネン教授が執筆した論文の中で最も関心をそそる論文を合わせて読んだ。そこからさらに、ダイナミックシステムアプローチの真髄である数式モデルの構築とコンピューター・シミレーションを活用した発達研究の道を開拓していった、ポール・ヴァン・ギアート教授の論文についても再度読み返していこうと思う。

この夏の間にヴァン・ギアート教授のどの論文を重点的に読み返すべきかを吟味している時、ある論文における数式記号が読みづらいものがあることに気づいた。それは今から三年前に印刷をした論文であり、当時は学術機関に所属しておらず、データベースから形の整った論文をダウンロードすることができなかった。当時は、インターネット上でアップされている論文を印刷するしかなかったため、体裁が不十分なものが混じっていたのだろう。そのうちの一つがこの論文であった。

当時の自分がどのような考えや思いで発達研究に従事していたのかが懐かしく思えた。探究を取り巻く当時の環境は決して恵まれたものではなかったが、今と同じような情熱が存在していたことは確かであった。現在は、学術探究に関して非常に恵まれた環境に私は置かれているが、あの時の情熱を持ち続けながら、いや当時の情熱以上のものを持ち続けながら日々の探究に従事したい。今日は早朝から論文の執筆に取り掛かり、それが完全に済んだ段階で、読みたい書籍と論文を読むことにする。2017/7/12

1293. 気概

早朝より論文を執筆し、少しばかり休憩を取ることにした。今、欧州の地で私が精神生活の均衡を保てているのは、やはり精神の糧となる和書の存在が大きいだろう。一時間ほどの休憩を取り、その間、私は辻邦生先生のエッセー集『北の森から』の続きを読んでいた。本書に散りばめられた辻先生自身の体験や考えなどが、自分に強く共鳴していることに気づいた。

下線を引き、書き込みをした箇所は多数に及び、それらの一つ一つが私にとって重要な意味を持っていることは確かであるが、ここでそれらを一つ一つ取り上げることはしない。それらの総体が自分の内側を駆け巡り、その感覚が自分の精神の支えや糧になっていることがわかる。その事実が何よりも重要であった。

日々の生活の中で、私は必然的に様々な言語体系に触れている。自然言語に関して言えば、英語、オランダ語、日本語であり、自然言語以外であれば、数学言語、プログラミング言語、音楽言語などである。そして、自然言語をさらに細分化してみると、科学言語と哲学言語が私の言語世界の中心を占めていることがわかる。

だが、時に私は、無性に詩的言語や霊的言語に触れたくなることがある。それらに触れなければ、まるで自らの精神が溶解してしまうかのようである。この現代社会において、詩的言語や霊的言語がないがしろにされている実情はとても嘆かわしい。同時に、本物の詩的言語や霊的言語がいかに少ないかについても嘆かざるをえない。

偽物の詩的言語や霊的言語が溢れている状況は、それらの言語体系の存在価値を棄損し、それらの言語体系が持つ真の意味を骨抜きにしてしまっている事態を招いているように思えて仕方ない。そうした状況にあって、私はなんとか真の詩的言語や霊的言語が体現された文章を読もうと努めている。辻先生の文章はそうした例の一つだ。

改めて、人には様々な領域での探究があり、その探究方法も各人様々であることを知る。また、人はそれらの領域の中で独自の課題に取り組み、同時代との向き合い方に際しても様々であることを知る。この世界へ真の調和と発展をもたらすための苦闘の仕方は各人様々なのだ。ここで私はもう一度、自分がどの領域を通じて、どのような課題とどのように向き合い、その課題を通じて同時代にどのように関わっていくかを見つめ直したいと思う。

それは今行わなければならない検証作業であり、これから絶えず行わなければならないものだ。異国の地に身を置くことを通じて、自己と母国を絶えず見つめ、両者の課題と向き合いながら生き続けることは、自分の人生に課せられた一つの大きなことなのだと思う。それを避けることなどできず、それと向き合うことを通じて初めて、自分の日々が確かなものとして形成されていくことを実感している。

天気予報の通り、午前中から雨が降り始めた。この雨とともに流してしまいたいものが自分の内側にあるのは確かだが、そうした衝動的な思惑に飲まれることなく、この雨とともに一歩一歩前に進むし

かないのだと思う。この雨を自らの気概で蒸発させてしまいたい。そのような気概を持って、午後からの仕事に打ち込みたいと思う。2017/7/12

1294. この数年間とこの一年

仮眠を終えた私は、夕方の仕事に取り組み始め、今少しばかり手を休めた。先ほどまで、ウィルバーのSESの注釈に目を通していた。本文よりも細かな字で書かれた250ページに及ぶ注釈を全て読むのは骨の折れる作業であり、途中からは自分の関心事項に合致する箇所のみを読むように心がけた。初版からすでに20年の時が経過しているが、SESという作品の価値は現代においても──いや、このような現代社会だからこそ──色あせることはない。

ウィルバーが現代社会の病理と真正面から格闘した痕跡を本書の随所に目撃することができるし、何より、それは痕跡として残っているだけではなく、格闘時の精神エネルギーが依然としてこの作品の中に生き続けている。ただし、ウィルバーの作品と数年間離れ、発達科学の研究に従事してきた者として、発達現象に関するSES内の記述はそれほど充実しておらず、具材として堅牢なものではないという思いが湧き上がってきた。これは偽らざるをえない感覚であり、私がウィルバーの思想体系に熱心に浸っていた時には湧き上がりもしなかった感覚である。

SESという作品は、ウィルバーが構築したコスモロジー（宇宙論）であり、それゆえに取り扱われる発達現象は、多様な発達領域のものではなく、「意識の発達」と呼ばれる非常に漠然としたものに留まっている。そうした点において、発達現象を議論する際の材料に堅牢性が感じられなくなっている自分がいた。とはいえ、全体としてのウィルバーのコスモロジーからは依然として考えさせられることが多いのは確かである。現代社会に根付く深い問題に対峙する形で自らのコスモロジーを築き上げ、自らのコスモロジーを構築する中で現代社会の集合的な病理と対峙した点は、この作品を読むたびに大きな感銘を受ける。

このように、私がウィルバーの思想体系から得られる印象というのは、ここ数年の間に少しずつ変化していたようだった。先ほど私は、フローニンゲンの街で過ごしたこの一年を振り返ってみようとした。だが、どこから振り返れば良いのかという着手の地点を掴むことができず、「フローニンゲンで過ごした一年間」という言葉の中から浮かび上がるぼんやりとした感覚の中に浸っていた。

大きな変容を遂げたようでいて、全く変容を遂げていないような一年。全く前に進めていないようでいて、大きく前に進んだ一年。この一年間はそのような矛盾した時間だったように思える。今、私はこの一年間に書き留めてきた日記を読み返すことはしない。しかし、この一年間、日々の生活を克明に書き留めてきて本当によかったと思う。

日記を書くことがなければ、諸々の意味で今の私は存在していなかったかもしれない。毎日の格闘や小さな歩みが、この一年間の日記の中に大切に仕舞われていることだけを確認できればそれでよかった。

自分がこの世界を歩いているという確かな感覚を形にしながら、この世界を通じて自らを刻成していくこと。それはフローニンゲンで過ごす二年目にも続けていきたいことであり、これからこの世界のどこに住むことになろうとも続けていきたいことである。「旅日記」なるものは存在せず、全ての日記は旅日記となる。2017/7/12

1295. 真に強靭な思考の第一段階:「ヴィジョンロジック段階」の思考特性

ウィルバーのSESの注記を読み、先ほど第一部も読み返した。ここでまた少しばかり何か文章を書き留めておこうとする衝動が起こった。

今日はとても風が強く、いつもは優雅に空を飛ぶ鳥たちも、今日ばかりは自由自在に空を飛ぶことが難しいだろうと思っていた。しかし、書斎の窓越しに空を改めて眺めてみると、強い風をもろともせずに空を飛ぶ鳥たちの姿があった。抵抗を抵抗とせず、抵抗を推進力に変えるあの姿から、私はまた一つ重要なことを学ばされたようだった。

書斎の中にバッハの音楽が流れゆく。昨日、以前から購入を考えていたバッハの楽譜を購入し、それが届くのが待ち遠しい。日々の作曲実践の中で、バッハの楽譜を五線譜上に再現し、解析的かつ感覚的な楽曲理解を試みたい。

明日は久しぶりに大学の図書館を訪れ、夏季休暇の後半に読む予定の論文をいくつか印刷しようと思う。フローニンゲン大学の教授陣の夏季休暇は以外と短く、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン教授は明日から研究室に戻るそうだ。

一年目のプログラムが終了し、二年目のプログラムが始まるまでの期間は、実質的に二ヶ月半弱あり、その期間は夏季休暇に当たる。しかし、プログラムが進行していた時以上に、私は文章を読み、そして文章を書く日々を送っているようだ。大学という正規の学術機関に所属する形で探究を続け、そうした機関に所属しない形で探究を続けることの双方が重要なのだと改めて思う。

先ほど、SESを閉じ、本棚にしまったところで、その中で再度ここで書き留めておくべき内容は何かを考えていた。発達科学を探究する者として、やはり関心を持つのは、ウィルバーが命名した「ヴィジョンロジック段階」という意識の発達段階である。ウィルバーはピアジェの発達モデルの延長線上にこの段階を捉え、オーロビンドが提唱した高度な霊的認識段階の前にこの段階を捉えているがゆえに、ヴィジョンロジック段階の特性はなかなか捉えづらい。

つまり、ピアジェの認知的発達モデルとオーロビンドの霊性発達モデルの二つが掛け合わせられてヴィジョンロジック段階というものが据えられているため、二つの発達領域の特性が混じっている印象を拭うことができないのだ。こうした印象を与えるのは、ウィルバーが指摘しているように、認知を司る発達領域と霊性を司る発達領域は明確に切り分けることができないという点と、ウィルバー自身の信念である「どの発達領域も高度な段階に至れば霊的である」という点が影響しているだろう。

このように、ヴィジョンロジック段階の特性は依然として詳細を把握することは難しいが、今回改めて気づかされた重要な点が一つある。それは、ビジョンロジック段階の認知的性質に関するものであり、その言語特性についてである。ウィルバーは、ピアジェが提唱した「形式操作段階」に続く「後形式操作段階」を、ヴィジョンロジック段階と重ね合わせている。とりわけ重要なのは、形式操作段階はこの世界のある領域における問題を解く際に力を発揮することができるのだが、その領域そのものに対して新たな問題を投げかけることができないという特徴を持つ。

一方、ヴィジョンロジック段階では、既存の問題を解くことのみならず、既存の問題が生まれる領域のコンテクストそのものを適切に把握することができるがゆえに、新たな問題提起をすることができるという特徴を持つ。現代社会においては、問題を解くことに躍起になる傾向が依然として強く、問題解決能力の涵養が声高に叫ばれていることにそうした傾向を見て取ることができる。しかし、一歩冷静になって考えてみれば、問題そのものが生み出されるコンテクスト（あるいは構造）そのものを把

握し、それに対して問題を投げかけることができるような「問題提起能力」の存在を私たちは見落としていることに気づくのではないだろうか。

問題が生み出されるコンテクストに盲目的であっても、問題だけに焦点を当てることができれば、確かにその問題は解決されたかのように見える。そうした仮の問題解決で止まってしまうのが、形式操作段階の思考特性である。そこからさらに思考様式を深めると、様々な問題が生み出されるコンテクストそのものに感性が開き、コンテクストに対して新たな問題提起をする認知能力が芽生える。それがヴィジョンロジック段階の認知的発達特性の重要な点だろう。

そのような特徴を考えてみた時に、形式操作段階とビジョンロジック段階の言語がもたらす感覚的な差異について改めて気づかされることがあった。端的に述べると、形式操作段階の言語は、一見すると堅固な言葉の鎧を持っているのだが、何とも言えない固着性がある。

そうした固着性をもたらしていたのは、おそらくその段階の思考特性が問題に立脚するコンテクストに盲目的であり、それと同一化しているからなのかもしれない。一方、コンテクストそのものを対象化し、さらには複数のコンテクストを行き来し、多様な意味を網の目のように構築できるヴィジョンロジック段階の言語は、独特の堅牢性を感じさせる。こうしたことからも、真に強靭な思考とは、少なくともヴィジョンロジック段階に到達した思考を指さなければならないと思えてくる。2017/7/12

【追記】

厳密には、ヴィジョンロジック段階の意識構造は、前期・中期・後期と三つに分類される。ここで述べているヴィジョンロジック段階の特性は、中期と後期のものを指す。2017/7/19

1296. 客員研究員としての道

先ほど浴槽に浸かっていると、フローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えたら、すぐに博士課程に進むのではなく、在野で一年間ほど研究をするのでもなく、客員研究員として米国の大学に所属するという選択肢が浮上した。それはこれまで考えたことのないものだった。そもそも客員研究員という言葉を知ったのは、先ほどふとしたきっかけで調べものをしている時に判明したのだが、

大学で講義を担当することなく、通常一年間ほどの期間を研究だけに従事できるポジションのようである。

現在進めている日本企業との協働プロジェクトを引き続き行いながら自分の研究を進めていくのであれば、客員研究員という選択肢も一考に値すると思った。成人発達に関する研究はもちろんのこと、より個別具体的なテーマとしては、MOOCの研究を進めたいという思いがある。米国のいくつかの大学はMOOCの研究に力を入れていることを知っており、その中でも一つ以前から気になっていた大学があるため、そこで客員研究員としてのポジションを得ることができれば望ましい。

幸運にも浮上した選択肢に感謝しながら、そうした道もあるということをノートに書き留めておいた。その道を重要な選択肢として残しておくためにも、九月から始まる二年目のプログラムで自らの探究をさらに推し進めていく必要があるだろう。

夕食後、すっかり天気が回復し、空に晴れ間が広がり始めた。時刻は八時を過ぎたところだが、太陽はまだ沈む気配がない。そうした太陽の動きと歩調を合わせるかのように、私も今日の探究を止める気配がない。もう少しばかり読みたい書籍に目を通しておきたいと思う。とりとめもない思考が相変わらず続き、現在自分が携わっている研究をこれまでとは違う表現で捉えた自分がいた。

現在の私は、知性を生態系とみなし、生態系の振る舞いを研究し、生態系それ自身とその振る舞い自身が高次元のものに変容するプロセスとメカニズムを研究しているのだと知る。そして私は、知性という生態系をネットワーク科学とシステム科学の観点から探究しているのだと知る。なぜこのような認識が生まれたのかは定かではない。自らの探究内容をこれまでとは違った形で捉えようとするような言葉が自発的に生まれたのだ。

細かなことを言えば、その他にも付け加えたいことはあるが、上記の表現は自分の研究の大きな輪郭を適切に捉えた言葉だと言える。就寝に向けて最後の仕事に取り掛かる前に、このような言葉が突如生み出されたのは不思議なことであった。2017/7/12

1297. 内なるダイモーンに導かれて:MOOCの多角的な研究

一日の仕事を全て終え、本日最後の日記を書き留めておきたい。やはり、今日の夕食前に突如目の前に現れた「客員研究員」としての道についてもう少し書き留めておかなければならないだろう。客員研究員としての資格が自分にあるのかどうかもさらに詳しく調べてみなければならないし、それに向けた様々な準備を年内から始めていかなければならない。

まずは、自分が所属したいと思う米国のとある大学に連絡を取ってみることをしたい。具体的には、MOOCに関する研究に携わっている部門の担当者にまずは連絡をしたい。この連絡に関しては今日明日するようなものではなく、九月の中旬あたりに連絡をするということをスケジュールに書き込んでおいた。

フローニンゲンという街は今の私にとってこれ以上ないほどの生活場所であり、フローニンゲン大学はこれ以上ないほどの研究拠点である。しかしそれでも、あるいはそうであるがゆえに、この場所に三年間いることはできないような気がしている。この街と大学から一度大きく離れる必要があるように思うのだ。申し分ないほどの環境が与えられていることが、どうやら自分には耐えられないようなのだ。

今の環境を失ってでも、新たな環境に身を置こうとする自分がまだ強くいる。こうした衝動が芽生えるというのはもはや、探究を司るダイモーンに私が取り憑かれていることの証左に他ならないように思えてくる。仮にそうであるならば、やはり私はこのダイモーンを信じてみたいと思うのだ。この世界の中で生活拠点が変わろうが、この世界の中で生活をしていることに変わりはない。

また、この世界の中で探究拠点がいかに変わろうが、この世界の中で探究を継続していることに何ら変わりはないのだ。そのように考えると、私は自分に取り憑いたダイモーンに感謝をしなければならないだろう。それが導くところに、自分を置くだけだ。それ以上のことは一切必要ないように思えてくる。

仮に私が来年の今頃に、再渡米に向けての準備を始めているのであれば、それはこのダイモーンの導きに他ならないことをここに書き留めておく。その時、この日記の存在について忘れていたとしても一向に構わない。重要なのは、そのような導きが今日という日に自分に起こっていたということ

であり、それを書き留めることを通じて、自らのダイモーンに感謝の念を持ったということである。それだけが形となって残っていればいいのだ。その形が新たな形を生み出すのだから。

フローニンゲンの夏の夜空に入道雲がゆっくりと通り過ぎていく。その光景は、白い雲と黒い雲が大名行列のように行進しているかのようだった。

フローニンゲン大学での二年目の主たる研究、そしてこれから数年間にわたって携わっていく研究は、MOOCを中心に据えたものである。より具体的には、これまでに引き続き、発達心理学の観点からMOOCの研究をしていくのと同時に、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法を用いて研究を進めたいと思う。その背景には、既存のMOOCの研究はどうしても旧態依然とした統計的手法によるグループ比較のようなものしかなく、MOOCが本来持っている動的な学習プロセスがまだほとんど研究されていないということがある。

さらには、MOOCを提供する大学には大量のデータがほぼ手付かずのまま眠っており、データの分析方法に苦心している様子がひしひしと伝わってきており、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法は、そうした大量のデータを活用することによって新たな知見をもたらしてくれるだろうという希望を私は持っている。実際に、私がフローニンゲン大学のMOOCを統括する教授から期待されているのはその点だ。私が二年目に所属するのは「実証的教育学」というプログラムであるから、また応用的なデータ解析の手法を学ぶことになるだろうし、学習理論や教育理論に関してもより深く学ぶことになるだろう。

そこに教育哲学の観点を付け加え、私はこれからの数年間における学術研究の中心を、MOOCを多角的に探究することに置きたいと思う。教育科学、発達科学、教育哲学、複雑性科学（ダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクス）の観点からMOOCについて掘り下げることは、自分にとって一つの大きなテーマになるという予感がするのだ。2017/7/12

1298. 夢見の意識の中でのダイナミックシステムに関する気づき

今朝は五時に起床し、五時半から今日の仕事を開始した。ここから夜の九時まで普段と同じように、読みに読み、書きに書く一日を送りたい。今朝は小鳥の鳴き声に誘われる形で目を覚ました。太陽が完全に昇る前のこの時間帯は、とても清澄な雰囲気を醸し出している。

書斎の窓から早朝の空を眺めると、遠くの方に青空が広がっており、手前の空には、黒い巨大な竜のような雲が現れていた。その雲の下を数十羽の鳥の群れが飛んでいるのが見えるが、彼らの姿は蝶と同じぐらいの大きさに思えた。その時、その雲の大きさに気付かされるのと同時に、巨大な竜のようなその雲は意外と遠い位置にあることを知った。

昨夜もおそらく何かしらの夢を見ていたのだと思うが、その印象は強くない。ただし、起床直前に、ダイナミックシステムに関する一つ重要な気づきを得たようだった。実際に、今朝はその気づきを得た瞬間に目を覚ました。目を覚ました瞬間に、その気づきをノートに書き留めておこうとしたが、ノートが手元になかったため、それはできなかった。

改めてその気づきを思い返してみると、起床直前に感じていたほどの重要性を持っているようには思えない。いつも夢見の意識の中で得られる気づきというのは、その瞬間において極めて重要だという感覚がありながらも、目を覚ましてみるとそれほどの重要性を感じられないことがある。ここには二つの解釈の仕方があるだろう。一つは、夢見の意識の中で得られた気づきは、目を覚ましてみた時の判断が示すように、実際にはそれほど重要ではないというもの。

もう一つは、夢見の意識の中で得られた気づきは、覚醒意識の判断基準から漏れてしまうほどの重要性をやはり持っているというものだ。意識状態によって得られるものが異なり、意識状態によって世界認識の眼が異なるのであれば、後者の解釈の仕方が正しいように思う。

とりあえず私は、夢見の意識の中で得られる気づきというのは、覚醒状態の感覚や判断の枠組みから漏れてしまうような洞察を含んでいると結論づけている。そうした結論に導かれるかのごとく、私はことあるごとに自分の夢を取り上げ、それを日記に書き留めているのかもしれない。

今朝の夢見の意識の中で得られたことは、今文章にしようとすると、やはりそれほどの重要性を感じられないが、上記の理由からここに書き留めておく。それは極めて単純であり、ダイナミックシステムは多様な階層を持ち、その一つ一つの階層の中に存在する要素が作り出すシステムも一つのダイナミックシステムに他ならない、というものだ。つまり、私たちがダイナミックシステムだと思っているものは、実は上にも下にも無数のダイナミックシステムが連なっているということである。これに付随して、多くの人はある一つの階層内のダイナミックシステムに囚われ、それを包摂するダイナミックシス

テムの存在や、それが包摂するダイナミックシステムの存在を見落としがちである、という気づきが得られた。

ダイナミックシステム理論に精通している者から見れば、これは当たり前に思えるかもしれないが、夢見の意識の中の私は、これらのことを重要だと思っていた。一つのダイナミックシステムを観察するとき、それを取り巻くダイナミックシステムの入れ子構造を忘れてはならない、ということを自分に言い聞かせるような気づきだったのかもしれない。

確かに、そのような気づきを持って、目の前をゆっくりと通り過ぎていく巨大な竜のような雲を眺めてみると、先ほどの捉え方とは随分と異なる見方ができる。一つのダイナミックシステムとしてのこの雲を取り巻く多様なダイナミックシステムの階層に考えを巡らせると、目の前を通り過ぎる雲の挙動が新たな眼で観察される。

この雲の動きを生み出しているのは、多様な階層に存在するダイナミックシステムの相互作用であり、それは複雑な現象に違いないが、ある特定の規則に基づいているように思えてくる。今日は午前中に、ダイナミックシステム理論に関する論文と専門書を読むことにする。2017/7/13

1299. その日に向かって

昨日は日記を書くことを控えようと思っていたが、結局平均以上に日記を書き留めるような不思議な日だった。日記を書くことを控えるというよりも、自発的に書きたいことが浮かんできた時だけ文章を執筆するという、ごく自然な姿勢で日記を書き留めようと思っていたのだが、それが結果的には多くの文章を書き残すことにつながっていた。

毎日私は、日記を書くことを一つの習慣にしているが、実はそこには意思の力による強制はない。自らの意思を行使する形で何かに取り組むことは、強制によるものであり、強制の産物に対して、私はそれほど価値を見出していないのだろう。

意思の力を超えた自発的な力が私たちに働きかけるとき、そこで生み出されるものには特殊な価値が宿るように思える。日記を書き留めることに関しても、私は自らの意思を働かせないようにしている。

つまり、日記は強制的に書かれるようなものではないという認識に基づいて、毎日自発的に文章を書き留めているのだ。昨日もまさに、自発的に文章を書き留めていたら、気付かない間にいつもの平均的な分量を超えていたということが起こった。今日も、意思を働かせて日記を書こうとするのではなく、書くべき必然性に裏打ちされる形で、意思を超えた力によって日記を書き留めていこうと思う。

昨夜、フローニンゲン大学での二年目のプログラムが終了したら、米国のある大学で客員研究員として一年間ほど研究に従事しようと思い立ったことを日記に書き留めていたように思う。今朝起床してみると、その思いは弱まることなく、むしろ強まっていることに気づいた。この道を実現させる方向で、私はこの一年間をオランダの地で過ごすことになるだろう。先ほども早朝にコーヒーを入れた時、客員研究員として過ごす一年間について思いを馳せていた。

その大学における客員研究員という待遇は、大学で講義を受け持つことなく、研究に従事できるというものだが、大学から給料を支払われるわけではない。しかし、その大学で提供されるコースに関しては、担当教授の許可を得れば聴講することができるらしい。私はその一年間の期間において、主にMOOCの研究に従事するだけではなく、その研究をさらに深めるためのコースをいくつか聴講したいと思う。二学期制を採用するその大学において、各学期に二つのコースに絞って聴講をしたい。

その組み合わせは明確であり、一つは非線形時系列データの分析に関する統計学のコースとダイナミックシステム理論に関する応用数学のコース、もう一つはE-learningの理論と分析手法に関するコースだ。それらのコースを聴講する中で、担当教授と面識を持ち、その次の年はその大学の博士課程に進もうと思っている。今のところこれが、自分が最も熱意を持って歩むことのできる道だと確信している。その日に向けて、オランダで過ごす今日という一日の中で、自分がなすべき仕事に着実に取り組みたい。2017/7/13

1300. 淡々とした一日

ふと時計を見ると、夜の九時に近づいていることに気づいた。今日はいつも以上に、時間があっという間に過ぎ去っていったように思う。それでいて、改めて今日という一日を振り返ってみなければ、

自分が何をしていたのかを覚えていないような一日だった。今日も間違いなく自分の取り組むべきことに没頭していたのだが、その没頭が時間感覚を変容させていたようだった。

今朝は五時に起床し、五時半から早朝の仕事を開始した。最初に取り掛かっていたのは、私が以前師事をしていたオットー・ラスキー博士が執筆した論文だった。何かの折を見て、ラスキー博士は私にメールを送ってくれることがあり、私も何かをきっかけにラスキー博士が残した仕事をふと思い出すことがある。昨日から書斎の机の上に積み上げられた論文を順番に読み進めていたところ、論文の山の一番上にラスキー博士の論文があり、今朝はその論文を読むことになった。

これまで長らくラスキー博士の仕事を辿ってきたこともあり、知識面に関して、最新のその論文から何か新しいことを学んだわけではないのだが、改めてラスキー博士が28個の思考形態を提唱した意義と弁証法思考を重視する意味について考えを巡らせていた──ラスキー博士が提唱する弁証法思考は一般的な意味のそれではない。その意味と意義については、いつか別の機会で触れることになるだろう。今はその時ではない。

その次に取り掛かっていたのは、トム・ハグストロームというスウェーデン人の発達論者の論文“The generality of adult development stages and transformations: Comparing meaning-making and logical reasoning (2015)”だった。彼の論文は、ロバート・キーガンの主体客体モデルとマイケル・コモンズの複雑性階層モデルを比較しているものであり、こちらは非常に得るものが多かった。両者のモデルの類似点と相違点について、私がこれまで見落としていた箇所がいくつかあり、今後発達モデルのメタ理論的研究に従事することがあれば、再びこの論文を参照することになるだろう。

二つの論文を読み終えたところで、私は久しぶりに大学の図書館に足を運んだ。依然として書斎の机の上には読むべき論文が積み上がっているが、八月中に読みたい論文がまだいくつかあったため、六本ほど追加で論文を印刷した。

図書館に向かう最中、「タレントアセスメント」でお世話になったスーザン・ニーセン先生とばったり出会い、少しばかり立ち話をしていた。彼女は私の論文のセカンドレビューアーであり、八月初旬にフィードバックをもらうことになっている。お互いに夏季休暇の計画について話をし、彼女は再来週

あたりからイタリアのシチリア島に行くらしく、私はデンマークとノルウェーに行くことを伝えた。そのような立ち話を終え、論文の印刷を終えたところで自宅に戻った。

午後からは、ステファン・グアステロ教授が編集した“Chaos and complexity in psychlogy: The theory of nonlinear dynamical systems (2009)”を読み始めた。本書は500ページに及ぶ内容を持っているが、掲載されている論文のいくつかは非常に面白く、食い入るようにそれらを読んでいた。200ページほど読み終えたところで本書を閉じ、来週末に迫ったオンランゼミナールの説明資料作りに取り掛かった。本日を持って、無事に第二回目のクラスの資料が完成した。

一日を振り返ってみると、今日はそのような過ごし方をしていた。つらつらと時系列的に今日の出来事を振り返ってみたが、今日は自分の内側の動きが非常に穏やかであったことがわかる。自分のなすべきことに専心していたことは確かだが、どこか今日は淡々と終わったという感じがする。そのような日も時にはあるものだ。2017/7/13